

Anne DeWitt,
Moral Authority, Men of Science, and the Victorian Novel
(Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture)
Cambridge: Cambridge UP, 2013. 287pp.
Hardcover £60.00, ISBN 978-1-107-03617-8

西垣佐理

本書はケンブリッジ大学出版、19世紀文学・文化研究シリーズの一冊で、エリザベス・ギヤスケル、ジョージ・エリオット、トマス・ハーディ、動物実験反対派の作家たち、H. G. ウェルズというヴィクトリア朝小説家の作品に見られる科学の社会・文化的地位の変容に対する小説上の反応について分析したものである。本書は元タイエル大学の博士論文としてまとめあげたもので、メアリー・プーヴィヤジリアン・ピアといった先行研究に依拠しつつ、それまで科学と文学が一つの文化圏に属して評価されていた伝統から、二つの文化圏に分離していく様子を述べている。それによって、個々の分野の専門職化とヴィクトリア朝小説における二つのプロット — すなわち科学者としてキャリアを積む人物に関するプロットと求婚のプロット — との関連について分析し、「科学と文学の一体化と乖離」という一種の歴史的様相を描き出そうと試みている。

本書は大きくイントロダクション、ヴィクトリア朝小説を扱った5つの章および短いエピローグから成り立っている。以下、各章の概略を記した後に私見を若干述べてみたい。

イントロダクションにおいて、筆者は「この書物は、論争の中で閉じ込められた二つの文化の物語を語るのではなく、むしろ科学と小説執筆が専門職化していく過程の時代に小説というジャンルと科学教育に関する議論だ」(2)と述べている。ヴィクトリア朝の科学および文学研究は、たいていの場合自然界に関する科学的理論と概念に焦点を当てており、それはヴィクトリア朝の科学と文学が「一つの文化」内に存在し、ゆえに概念はそれらの間を難なく生産的に行き来するという仮定によって裏書きされているからとする。こうした考えは、文学と科学が相互に影響力を持ちうるが、それらが互いにはっきりと異なり、距離を置いているとする我々の今日的視点は、我々が二つの文化圏に住んでいることから発展さ

せてきた視点のせいであると筆者は指摘する。

ヴィクトリア朝では科学と文学が一つの文化圏に存在していたことの証拠に、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』(1859)が広く受け入れられたという事実がある。その理由の一つは、この本が科学的知識を持たない読者でも利用しやすいように文学的表現かつ非科学的言説が用いられていたからである。この観点で考えると、筆者は本書で取り扱っていないが、ジークムント・フロイトの『夢判断』(1899)も極めて文学的な比喻(特にギリシア悲劇)を用いて自らの理論構築を進めている。このように、科学と文学の密接な関係は、その後の哲学者や文学研究者が広くこれらの書物を自分たちの批評にも取り入れているように、現代でも非常に大きな影響を及ぼしている。

小説家たちが科学を専門職であると表現し、ゆえに個人の道徳的関心から切り離すようになる間、19世紀の大半を通じて、科学者たちは超越した領域を可能にする権威、つまり個人の私生活と関連した権威として科学を確立しようと試みてきた。第1章、“The religion of science from natural theology to scientific naturalism”において、筆者はウィリアム・パレイとジョン・ハーシェルを含む科学者たちで始まる文学と科学の乖離の歴史を概観する。彼らは自然界の研究は、神に対する経緯を拡大させることで学生の性格を改善すると主張した。1850年代以降、トマス・ヘンリー・ハクスリーやジョン・ティンダルといった科学自然主義者は彼らが科学は宗教に取って代わるべきだと議論する際、科学の道徳的利益を指摘する。科学自然主義者はまた科学を有利な職歴に変えるべく奔走し、科学者は特別な知識を持った専門家だと主張した。しかし、彼らの中傷誹謗するものたちはこれら二つの目的を矛盾したものとして批判した。すなわち、それはもし科学が専門家によって行われる職業であるなら、それは道徳的精神的価値の非常に有効な源になり得ないという、自然科学者が文化的権威を確立した1880年代以降の小説に現れた批判である。

“Moral uses, narrative effects: Natural history in the novels of George Eliot and Elizabeth Gaskell”と題された第2章では、エリザベス・ギヤスケルとジョージ・エリオットの扱う前専門職的自然史の経験が、道徳的努力としての科学における信念や科学と小説の統合を導くものになると論じている。特にダーウィンの進化論が両作家の作品に大きな影響を与えていると筆者は主張する。さらに、ギヤ

ケルとエリオットは世界を観察し描写する方法としてのみならず、世界それ自体について述べる経験として科学と関わっているとす。二人の作者はともに自然史を主に取り扱うが、それは当時自然史が道徳的訓練として提示され、女性を含むすべての人にとって近づきやすいものとして位置づけられていたからである。

ダーウィンの影響を受けた作品例として、筆者はまずギヤスケルの『妻たちと娘たち』(1864-66)を扱っている。作品に登場するロジャー・ハムリーは、元々のモデルがチャールズ・ダーウィンだとされているほどに自然史とゆかりの深い登場人物として描かれている。兄オズボーンと対比されてあまり出来が良くないとされていたが、ケンブリッジ大学在学中に自然史の分野で頭角を現し、やがて一流の科学者となっていく。ロジャーの道徳科学で最も重要な関わりは、小説の求愛プロットにとってであり、医師の娘であるモリー・ギブソンとの恋愛は彼の科学的業績によって絡み合い高められている。恋愛面において、ロジャーは最初美しいが道徳観念の薄いシンシア・カークパトリックに惹かれ婚約していたが、シンシアから別れを告げられ、一流の科学者としてアフリカから帰ってきた後、それまでは自然史を通した親しい関係に過ぎなかったモリーの魅力を改めて認識し、接近していくことになる。

ここで筆者は、ギヤスケルが自然界との関わりを通じて、いかなる植物も不必要に傷つけない様子や鳥の巣を世話するといった親切心によってロジャーの道徳性を伝えていると主張する。また、モリーが父親の再婚決定を悲しんでいる際、ロジャーはいきなり手助けせずしばらく「観察」した後彼女を慰めるといったように、彼は自然史学者の態度でモリーに接する。ロジャーがモリーに示す親切心は、科学を教えることと道徳的行動を教えることが結びついたものだが、それこそがモリーがロジャーを愛する基礎となっている。また、ロジャーがシンシアからモリーへと恋愛相手を変えるのは、彼が科学者としての経歴を順調に積み上げていく過程と呼応している。つまり、科学者としての仕事が彼の道徳的義務形成と大いに関わっており、それによって彼自身が道徳的に優れた人物になり、その結果ロジャーは科学者や科学そのものに対して理解があるモリーを自分に適した相手として求めるようになるのである。このように、ロジャーの科学者としての経歴と恋愛における変化が見事につながっていると筆者は分析する。

ジョージ・エリオットはダーウィンの影響もさることながら、とりわけ彼女の

恋人だったジョージ・ヘンリー・ルイスとの関わりによって、自然史に触れることになった。エリオットが『ミドルマーチ』（1871-72）で彼女の化身とも言える若き医師、ターシアス・リドゲイトを登場させているが、ギヤスケルの作品とは対照的に、科学者として経歴を積むプロットおよび求婚のプロットは『ミドルマーチ』においてちぐはぐなものとなっている。そこでは、リドゲイトの結婚は彼の科学者としてのキャリアを頓挫させてしまうが、なぜなら彼は自分の私生活において自らの洗練された科学的想像力を訓練できなかったからである。『ミドルマーチ』は科学的思考が道徳的に利益になるという可能性を排除してはいない。しかし、それは科学の限界を批判し、女性登場人物と道徳的洞察力を提携させ、小説の仕事として道徳的に養成する後期小説に先んじているのである。

第3章 “‘The actual sky is a horror’: Thomas Hardy and the problems of scientific thinking” では、トマス・ハーディの小説が宇宙の広大さや熱力学的運命について悲観的推測を展開する。そのテーマは、リチャード・プロクターの天文学と物理学者ウィリアム・トムソンの雑誌記事で大いに議論されていたものである。ハーディにとって、より大きな宇宙を想像することは人間性の無意味さという確信を導き、ゆえに道徳的に有害だった。この効果は特に専門職の科学の場合において深刻なものだった。それは人間の生活に利益をもたらすためというよりもそれ自身のために知識を追求する。『狂おしき群れを離れて』（1874）においては、エリオットやギヤスケルの作品と同様自然史は科学的自然主義者が科学のために主張した種々の道徳的利益を生み出すことができる。だが、『塔上の二人』（1882）では、天文学者であるスウィジン・セント・クリーヴが自分の研究にますますのめり込んだ結果、彼と関わる人々、とりわけ婚約者のヴィヴィエットは宇宙に対して無情なほど無関心になる。ここで、科学的プロットと求婚プロット間の対立によって小説は天文学の部分とスウィジンの恋愛問題に関する部分に公式には分断されるのだ。

第4章の “‘The moral influence of those cruelties’: The vivisection debate, antivivisection fiction, and the status of Victorian science” で、筆者は19世紀の最後の30年間で行われた動物実験に関する議論が、それに関する懸念のみならず一般的に科学に対する抵抗によって動かされていたことを議論する。動物実験反対派の多くは女性であり、一方動物実験賛成派の多くは科学者の男性だったので、そうしたやりとり

はしばしばジェンダー用語で行われた。動物実験賛成派は科学的訓練を受けていない女性には動物への実験に関する結論を描けないと主張した。動物実験反対派は生体解剖者の職業的私欲によって関連した倫理的問題に対して判断力を失っていると反論した。その一方、女性の優れた道徳性はその実験への反対を導くと主張した。こうしたジェンダーや職業的専門技術、そして、生体解剖者の道徳的性格に関する問題は生体実験に反対する一連の小説、レナード・グレハムの『教授の妻』(1881)や、ウィルキー・コリンズの『心と科学』(1887)などによって取り上げられた。個々の小説では、彼の仕事が結婚プロットやヒロインの命さえ危機にさらすという物語が展開するにつれて、動物実験者の性格が頑なになっていく様子を描いている。動物実験反対小説は、ゆえに『ミドルマーチ』や『塔上の二人』に現れた求婚プロットと科学プロットの対立関係を極端に取り上げている。そして科学を小説における個人関係の表象を脅かすものとしている。その際、それはこの研究におけるすべての分離された領域の最も純然たる図を描いている。しかし、動物実験反対小説は、それを批評するためにこうした領域の分断を提示し、中には成功したロマンスで終わるものもある。その中では、男性が動物実験に反対することは、個人的な女性的道徳心が公的な男性の科学を支配するという適切な役割を全うした一つの兆候なのである。それでも、こうした小説が科学により排他的でないよう求めるときでさえ、小説自体は科学を排除する。動物実験反対の議論に関する言及を削減し、小説の特別領域だと主張する道徳問題へ読者の注意を引きつけるのである。

第5章“Science, aestheticism, and the literary career of H. G. Wells”では、ウェルズが動物実験反対派たちと専門科学は道徳的狭量を生み出したという見解を共有した。つまり、彼がそうした狭量さと遭遇することで、文学で身を立てるために科学者としての経歴を放棄することになった。しかし、熱心な崇拜者であり、かつてハクスリーの教え子だった身として、ウェルズはまた科学が道徳と科学の利点を生み出せるという考えに魅了されてもいた。このような矛盾した考えによって、ウェルズは科学を、第一義に小説を書くようになった社会的道徳的問題を統合させようとしていた際、自分の小説でいかに作用するのかを検証したのである。特にウェルズのSF小説の初期作品で、既存のジャンルを再生した。『タイム・マシン』(1895)は非ユークリッド空間についての幻想について描いている一方で、

『モロー博士の島』(1896)は動物実験反対小説の慣習に倣っている。しかし、ウェルズはまた彼の科学ロマンスは個人の間接関係を表象するのに適合させることができない。この限界によって彼は現実主義小説へと転向する。『アン・ヴェロニカ』(1909)、『トーノ・バンゲイ』(1909)、『結婚』(1912)は、科学者である主人公の専門職としての経歴と人間関係の葛藤を明らかにし、ウェルズが特にヘンリー・ジェイムズといった同時代の小説家との関わりで遭遇し、反対してきた芸術のための芸術という考えを批判することで、科学に対する彼のアンビヴァレントな見解を小説化したものである。

エピローグでは20世紀および21世紀における科学と文学の関係を考察している。筆者はここ100年においてこの関係に関する最も有名な文章として、C. P. スノウの「二つの文化」を取り上げている。スノウは科学と文学の文化間に亀裂があるのを見て大変嘆いたが、彼の小説『搜索』(1934)はこうした変化を支持し、科学的関心と人間の関心を互いに正反対に位置づける。ゆえにこの小説はヴィクトリア朝小説を支配するようになった科学と小説の関係を永続させている。だが、この関係は決して枠にはめられているのではない。エピローグの後半はリチャード・パワーズの『ガラテア 2.2』(1995)を論じているが、それはヴィクトリア朝文学とは対照をなし、言語、学習、記憶、そしてアイデンティティが共有された関係において小説と職業的科学(特に神経科学)を提携させている。小説は代わりにプロの文学批評に対して定義づけられるが、それは小説家と神経科学者たちに思い込ませる重大な問題に関わりのない空しい知的努力として描写される。

評者にとって面白いと思われたのは、ヴィクトリア朝では科学と文学は互いに緊密な関係にあり、一つの文化圏に属していたが、時代が進みそれぞれが専門職化していく中で二つの文化へと分離していく点である。特に動物実験反対小説においてこの科学者としての経歴を追究するプロットと求婚というプロットの分離がジェンダー問題とも密接に絡んでいるとする議論は大変興味深いものであった。また、エリオットやギャスケルの作品に見られた科学と文学の関係や男女関係との関連が、ハーディやウェルズに見られたそれでは、時代の流れとともに大きく異なっていったという論旨は説得力があったように思う。

本書は科学的用語を多々含み、ゆえに専門知識を持たない評者にとって難解とも思える箇所も散見されたが、小説と科学を道徳的・ジェンダー的・社会構造的

視点になって読み解く際、両者の関係が歴史的に語られることで、その変遷が明快で理解しやすいものでもあった。こうした研究をする人々にとっては有益な良書であると思われる。

(近畿大学講師)